

檀家総代を代表して一言、ご挨拶を申し上げます。

梅観宰朋和尚 二十三年にわたる住職のお勤め、ご苦労様でした。振り返れば、この二十三年というあいだは、住職にとりましても、また私にとりましても、長いようで アツトいうまの二十三年間でした。

宰朋住職は、関東大震災で消失した 浅草の寺を現在の伊興町寺町に再建し、本山の中興の祖といわれる、二十四世円晃隆満大和尚のお孫さんに当たり、その後を継いだ、私の九段中学校の恩師でもある、二十九世 天通影地大和尚のご子息であります。

二十九世は寺への様々なプランを抱きながらも、晋山よりわずか尅年半で急逝してしまいました。

ご母堂である三十世 宏雲妙顚禅尼は 本日ご列席の、瑞雲東堂老師をはじめ、多くの方々の助けを得ながら、十年間、

つぎの代へとつなぐため 必死で寺を維持してくださいました。

三菱商事でコンピュータの導入に功績を残し、会社員として一区切りを終えた、宰朋住職が 平成十年十二月に三十一世として晋山し、現在に至っていることは、皆様、御存知の通りです。

宰朋住職は就任早々、私達、総代たちを前にして、十年計画で新客殿建設、二十年でつぎの住職へのバトンタッチの道筋をつけると

いう構想を語り、それに向かい、着々と進んでまいりました。

檀家の皆様の負担を考慮し、客殿建立塔婆による積立など、新しい協力の仕方も取り入れ、宮大工の選択、何年か前からの

材木の手当と乾燥など、計画に対するスケジュール運びは、

まさに元商社エリート社員の面目躍如とするものでした。

一方、戦後七十年を超え、賃貸人の代替わり等をむかえた浅草の寺院跡地の管理にも尽力され、今後の寺の財政基盤を確固たるものとする道筋をつけました。

これらの業績のかずかずは 円晃隆満大和尚と並ぶ

東陽寺「中興の祖の一人と言っても過言ではないと思っております。体調不良とはいえ、約束の二十年を勤め上げ、次の如法慶一和尚に住職の役を譲られることは、これも当初の計画通りとしか言いようがありません。

この様な住職のもと、檀家総代の一人として、その事業に協力させてもらう機会を与えられたことに、改めて感謝いたします。

これからも東堂として如法慶一住職に、ご指導、ご鞭撻をいただき、元気な姿をお見せいただければと願っております。

ご苦労さまでした。

簡単ではございますが、私からの挨拶とさせていただきます。